2020年横浜ナザレン教会・聖霊降臨節第九主日礼拝（7/26）
「地べたからの希望」ローマ書 8:18～30

【聖書】
ローマ信徒への手紙 8:18 現在の苦しみは、将来わたしたちに現されるはず
の栄光に比べると、取るに足りないとわたしは思います。19 被造物は、神の
子たちの現れるのを切に待ち望んでいます。20 被造物は虚無に服していま
すが、それは、自分の意志によるものではなく、服従させた方の意志による
ものであり、同時に希望も持っています。21 つまり、被造物も、いつか滅び
への隷属から解放されて、神の子供たちの栄光に輝く自由にあずかれる
からです。22 被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを
味わっていることを、わたしたちは知っています。
23 被造物だけでなく、“霊”の初穂をいただいているわたしたちも、神の子と
されること、つまり、体の贖われることを、心の中でうめきながら待ち望んで
います。24 わたしたちは、このような希望によって救われているのです。見え
るものに対する希望は希望ではありません。現に見ているものをだれがな
お望むでしょうか。25 わたしたちは、目に見えないものを望んでいるなら、忍
耐して待ち望むのです。
26 同様に、“霊”も弱いわたしたちを助けてくださいます。わたしたちはどう祈
るべきかを知りませんが、“霊”自らが、言葉に表せないうめきをもって執り
成してくださるからです。27 人の心を見抜く方は、“霊”の思いが何であるか
を知っておられます。“霊”は、神の御心に従って、聖なる者たちのために
執り成してくださるからです。28 神を愛する者たち、つまり、御計画に従って
召された者たちには、万事が益となるように共に働くということを、わたした
ちは知っています。29 神は前もって知っておられた者たちを、御子の姿に
似たものにしようとあらかじめ定められました。それは、御子が多くの兄弟の
中で長子となられるためです。30 神はあらかじめ定められた者たちを召し出
し、召し出した者たちを義とし、義とされた者たちに栄光をお与えになった
のです。

1　驚くほどの現代性

　聖書を読んでいていつも驚かされるのは、2000年前の古文書である聖書に書かれている事が、21世紀に生きる私たちにもぴたりと当てはまることです。今日のローマ信徒への手紙第8章18節から30節もそんな一節です。昨日、スマホでニュースサイトを見て暗い気持ちになりました。7月はじめに豪雨に襲われた熊本県南部では川が氾濫して多くの犠牲者を出しましたが、同じ地域に、一ヶ月経たずして再び豪雨が襲い大きな被害が出ているというのです。ようやく片付け始めていたのに、再び土砂に埋まってしまった我が家を前にして人々は呆然自失であったそうです。比較的きちんと治水されている日本でも、台風ならいざ知らず毎年のように梅雨の豪雨によって多くの人が命を落と

すとは。ここ数年の梅雨の豪雨の激しさは、明らかに今までとは異なるように思いますし、地球温暖化が原因の異常気象、人間がまるで神のごとく振る舞い、自分達の欲望を満たすだけのために地球環境を破壊した結果だと言われています。2000年前に書かれた聖書にすでに記されていることです。

2　創世記3章

　聖書の最初の書物、創世記には、神がこの世界とそこにある全てのものを造られ、「**極めてよい**」と喜ばれた、そして神は、人間を特別な存在として造られた、ご自身に似せて人間をお造りになり、神の息を吹き入れて生きる者としてくださったと記されています。神は、最初の人間、アダムとエバを沢山の草木が豊かに生い茂る楽園へ住まわせました。そして言われます。「園の全ての木から取って食べなさい。但し、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。」ここで「死ぬ」とは、神との関係が切れてしまう…という意味です。神の息によって生きるようになった人間は、神との関係が切れれば人間としての死を迎えるしかありません。このただひとつのルールは神が、ご自身と人との間に定めた「境界線」です。「ここまでは来てもよい、しかし、これ以上神の領域に踏み込んではならない」という境界線を神は定められたのです。しかし、人間は、誘惑する蛇に唆され、自分が神のようになりたいと思い、この境界線を侵します。エバとアダムは善悪の知識の木の実を食べてしまい、神との関係を壊してしまうのです。このことを神に咎められたアダムは、エバに責任転嫁し、エバは蛇のせいにします。深い信頼関係で結ばれていたアダムとエバ、しかし、神との関係を破壊した今、彼らの間の信頼関係も失われました。大切な人と気持ちが通じ合わない孤独は、私たちが身近に経験することです。ですが、破壊されたのは神と人との関係だけではありませんでした。神はアダムとエバにそれぞれ審きの言葉を告げるのですが、そこでこのように言われます。「**お前ゆえに、土は呪われるものとなった。**」（創世記3章17節）。「神になろうとするお前の欲望ゆえに、土は、この美しい被造世界は、私の喜びからこぼれ落ちた」と神が嘆いておられるようです。人間の神になりたいという欲望が、被造世界の秩序を破壊したのです。そして、その結果が2000年の歳月の後、今、目に見えて私たちの前にたち現れてきています。神が造られて「極めてよい」と喜ばれた世界が、人間の自己中心的な振る舞いにより、呻きをあげる世界となる事を聖書は描いています。パウロが22節で「**被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることを、わたしたちは知っています。**」と語る通りでしょう。人間の罪によって、被造世界までもが苦しんでいます。

3　被造物

苦しんでいるのは自然だけではありません。人間も苦しみ、人間社会も病んでいます。23節「**被造物だけでなく、“霊”の初穂をいただいているわたしたちも、神の子とされること、つまり、体の贖われることを、心の中でうめきながら待ち望んでいます。**」先ほどのアダムとエバの物語で、「人間が神との関係を壊した時、人間同士の信頼関係も壊れた」と申し上げましたが、それは今も続いています。この世界には、思想、信条、文化、国籍、習慣、様々に異なる人々が住んでいますが、自分達と異なる人々と互いに理解しあい、お互いに尊重しあって共存することはとても難しい現実があります。私たちは、「自分たちさえよければいい、自分たちの望みさえ満たされればいい」という自己中心的な思いで生きてしまう存在だからです。そしてそんな私たちが造る社会の現実は、まさに呻きを上げざるを得ないようなもの、私たちを深く愛してくださる神から遠く離れた世界です。

4　腐った現実

アイルランド人と結婚し現在、イギリスで保育士として働くエッセイストのブレディみかこさんという方がいらっしゃいます。前に礼拝説教で取り上げた事がある方です。ある説教者が、説教の中で彼女の『子どもたちの階級闘争』というエッセー集にある印象深い話しをしていましたので、その本を取り寄せて読みました。この本の中で、彼女は、自分のつとめる託児所を「底辺託児所」と呼びます。階級社会であるイギリスの労働者階級のまたその下、働くことさえできない人々の子供を預かる託児所、まさに社会の下から1％、社会のどん底にある託児所です。その現実は悲惨です。子供たちの家庭は、例外なく某かの問題、貧困、アルコール依存・ドラック依存からの回復者、家庭内暴力等等を抱えています。犯罪者も多く、ストリートギャングたちの子もいます。子どもが育つには不安定で過酷な環境ですから、当然、問題行動を起こす子は多くいます。他の子にすぐに噛み付いたり、暴力をふるったりする子は多くいます。怒りや戸惑いをどう表したらわからず、奇声を発し、くるくるくるくるくる、狂ったように回り続ける、友達にぶっつかって怪我させようが、壁や椅子・テーブルにぶっつかって自分が怪我しようが構わない、気が済むまでコマのように高速回転する子もいます。そして、子供一人あたり政府から支払われる補助金を目当てに、子供を産み続ける女たち、その補助金を狙う男たちもいるという具合。そうやって育てられた子供たちが大きくなり、また同じ事を繰り返す。

しかし、そこが民主主義国家イギリスの底力なのでしょうが、そんな子供たちにきちんとした保育を施し、親達にも助けを届けようという人達が必ずいるのもイギリス社会だそうです。この「底辺託児所」も、そういう人々によって創設・運営されていました。件のコマのように回る子も、底辺託児所で預かっている間に随分と落ち着きを取り戻したそうです。

ブレディみかこさんは、この底辺託児所を取り巻く現実を「腐った現実」と言います。「同じ腐った現実を幾度も反復している」と。しかし、それはイギリスの底辺社会だけではありません。この日本社会の現実もまた腐り切っていることを、私たちは毎日のニュースから知っているのではないでしょうか。昨日、21歳の母親が生後三ヶ月の赤ん坊を一人残し生活費を稼ぐために働きに行った間に赤ちゃんは亡くなり、母親が逮捕されたそうです。誰かこの母親を助ける人はいなかったのか、相談する人はいなかったのか、自己責任という言葉で、ハンディを負った境遇で生まれ育ち呻きをあげ苦しむ人々を、余裕ある環境にたまたま生まれた者達が「自己責任」という言葉で切り捨てる、そういう冷たく腐った社会、私自身、その社会の一員であり、自分が腐った現実を作り出している人間の一人であることを認めざるを得ません。

ブレディみかこさんは、このような社会の底辺を『地べた』と呼び、こう語ります。『地べたから見ると、社会の矛盾がよく分かる』。地べたから見る私たちの社会は、歪んでいます。人間の欲望という濁った泥水をたたえた世界。その地べたに押し込まれた人々は、どう言って良いかわからず言葉にならない呻きをあげるしかない世界です。2000年前から変わらない、いやますますひどくなる腐った現実があります。

5　地べたに来てくれた救い主

しかし、そんな地べたに、欲望で濁り切った汚水だめのような人間世界の地べたに、神の御子は来てくださいました。地べたから全世界を救うために、完全なる人間となって来てくださったのです。そして互いに互を大切にできない私たち一人一人の罪を父なる神に対する罪を、その身に負い、十字架の上に裁かれました。全く罪のない神の御子が、神を憎む私たち人間のために死んでくださった、そうして、私たちの罪を神様に償って下さいました。その三日後、完全に死んでいた主イエスは、新しい命へと甦えられました。その後、父なる神の身許に帰っていかれたのです。そのイエスさまと入れ替わりに、聖霊、見えないイエス・キリストが私たちの心のうちへと来てくださった、と聖書は語ります。2000年前の出来事です。

しかし、私たち人間社会はますますひどくなるばかりです。イエスさまの十字架と復活はなんの意味も持たないのでしょうか。私たちは、この腐った現実になすすべもないのでしょうか。

6　底辺保育所

先ほどのブレイディみかこさんの底辺保育所での事件です。ある日、この保育所にロザリーという子がヴォランティアとして来ました。彼女は小さかった頃、この託児所に預けられました。ロザリーの父親は家庭内暴力が酷く刑務所に入れられており、母親はヘロイン中毒で病院に入院しており、育ての親

である祖母はストリートギャングの陰の元締め。そこで、この託児所の責任者がロザリーを自宅に引き取り、育てたそうです。やがて、ロザリーは成長し保育士を目指すようになり、ヴォランティアとして託児所に戻ってきたのです。ちょうどそのロザリーの近くで、普段から他の子に噛みついてしまうアリスという子が、隣にいた子の腕に噛みつきました。噛みつかれた子は、当然のことながら大泣きします。ロザリーがすかさず噛みつかれた子のところに走り寄り手を差し伸べた時、噛みついた方のアリスが、びくっとして身を縮めました。普段から虐待を受けている子は、大人が手を上げるのを見ると瞬時に体が硬直してしまいますが、まさにこの時のアリスがそうでした。ロザリーは、そんなアリスを見てこう言いました。「**アリス、そうやって怖がるのもやめなさい。そうやってびくびくすると、それが気に障ってもっとあなたを叩きたくなる人たちがいるから。叩かれたくなかったら、堂々としていなさい。とても難しいことだけど、ずっとそう思って、そうできるようにしていると、そのうちできるようになる。**」

このロザリーの言葉について、ブレディみかこさんはこう言っています。「同じ腐った現実を幾度も反復する底辺社会。しかしアンダークラスの腐りきった日常の反復の中にも祈りはある。“とても難しいことだけど、ずっとそう思って、そう出来るように祈っていると、そのうちできるようになる”…ロザリーはきっとその祈りを全うするためにここにもどってきた。」

ブレイディさんは、「**ずっとそう思って、そうできるようにしていると、そのうちできるようになる**」というロザリーの言葉のうちに、切なる祈りを、同じことを繰り返す腐った現実を突き破る祈りを見出しました。絶望しかない地べたに希望をもたらす祈りを、ずっと繰り返す腐った現実を突き破り変えていくものを見出した、それは「祈り」のようであったというのです。

7　助けて聖霊

ロザリーのアリスへの言葉の中にブレディみかこさんが見出したものこそ、パウロが8:26で言っていることではないかと思います。**「同様に、“霊”も弱いわたしたちを助けてくださいます。わたしたちはどう祈るべきかを知りませんが、“霊”自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成してくださるからです。」**
私たちはどう祈るべきかを知らない…とパウロは言います。何故知らないのでしょうか。24節「**見えるものに対する希望は希望ではない。現に見ているものを誰がなお待ち望むでしょうか。**」とあるからです。24節、25節の「見る」というのは、「認識する」という意味です。罪ある私たちは、神の支配が完全に行き渡った罪なき世界は私たちが知らない世界です。しかし、私たちを深く愛し、神を裏切ってその当然の報いとして地べたで這いつくばり呻き苦しんでいる私たち一人一人をも救おうと、神の御子がやってきてくれた。神の愛を届けるために。地べたに神への希望をもたらすために。だからこそ、私たちは、このイエス・キリストに望みを事ができる、腐った現実の一部である自分ではない、腐った現実の外からこの現実を共に苦しむ為に来てくださったイエス・キリスト

に希望を持つことができます。私たちは神にどう祈るべきか、何を祈るべきかを分からなくても、私たちのうちに住んで下さる霊なるイエス・キリストはわかっておいでです。私たちのうちに住んで下さるイエス・キリストが、私たち以上の痛みをもって呻きをもって、父なる神に私たち自身を執り成してくださる、地べたから叫びをあげてくださるのです。「アッバ、父よ！」地べたに来てくださった神の御子の呻き叫び、それが私たちの希望の祈りとなります。

8　神を愛する者

さてそうするとどうなるか。パウロは続けます。28 節、「**神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということを、わたしたちは知っています。**」「神が愛する者たち」ではありません。その一歩先、「**神を愛する者たちには**」であることに意味があるように思います。

皆さんは、フランクルの「夜と霧」という本をご存知でしょうか。第二次世界大戦、ナチス・ドイツがユダヤ人に対して行ったホロコースト、600万ものユダヤ人が犠牲となったジェノサイトの中心施設と呼ばれるアウシュヴィッツ収容所に実際に囚われた精神科医が自身の経験を綴った書物であり、全世界で読み継がれているベストセラーです。この本の中でフランクルは非常に苛烈な収容所生活を語ります。収容される前に、労働に堪えないとみなされた多くの子供、女性、高齢者達は、容赦なくガス室に送られ殺される、そこを生き残っても衣服も全て、そして名前さえも剥ぎ取られて番号で呼ばれる、パンひとかけらと水のようなスープで極寒の中の重労働、働けなくなれば容赦なく屠殺される収容生活が待っています。まさに人間の尊厳など微塵もない存在に落とされ家畜以下の扱いを受ける中で、動物のようになって生き残ろうとするようになります。すぐ隣で寝ていた仲間が死んでも悼む声もない、少しでも暖まろうと着ているものを死体から剥ぎ取れるものは全て奪う、弱っている仲間の食べ物を掠め取ったり、仲間の脱走計画を密告し銃殺刑にしてでもナチに擦り寄る者もいたし、何よりも生きる気力を失い亡くなっていく人々が多かったそうです。しかし、そんな過酷な環境にあっても、人間としての尊厳をもって生きる事ができた人々がいたそうです。それは未来に目的を持っていた人々でした。「**何故生きるかを知っている者は、どのように生きることにも耐える。**」というニーチェの格言をひいて、精神科医であるフランクルは語ります。「**収容所のような過酷な環境に生きる人々には、彼らが生きる『何故』を、生きる目的をことあるごとに意識させ、収容所生活のおぞましさに精神的に耐えさせ、抵抗できるようにしてやらねばならない。**」生きる目的を見失うと人は過酷な環境で人間として生きることができなくなるというのです。しかし、過酷な現実に、また腐った日常の中で呻くことにも疲れた者、「生きることにもうなんの期待も持てない」という者に対して、我々はいったいなんと応えることができるでしょうか。

フランクルは言います。「**ここで必要なのは、生きる意味についての問いを180度方向転換することだ。私たちが“生きること”から何かを期待するのではなくて、むしろひたすらに、“生きること”が私たちから何を期待しているかが問題なのだと学ばなければならない。**」この「生きる事」を私たちの命の造り主である「神」と言い換えられると私は思います。「私たちが神から何かを期待するのではなく、寧ろひたすらに、神が私たちに何を期待しているかを求めて生きる」それが私たちに悲惨で過酷な現実の中でも絶望することなく、人間として、神から愛された者として生きる力を与えてくれるのです。アウシュビッツの収容所を解放した連合軍の兵士が見つけた、収容所の壁に書きのこされた言葉がその事を雄弁に物語っています。「**神が私にしてくださることはもう何もない。しかし、私が神にして差し上げることはまだまだある。**」この言葉を書いた人が生き残ったのか、命を落としたのかは分かりません。しかし、絶望の中にある人に生きる力を与える言葉を書き残した方を、神はこよなく喜ばれ、その胸に抱きしめておられると思います。

神から生きる目的を与えていただくのではなく、私たちが神に造られ、御子イエス・キリストの十字架ほどに神に深くその存在を愛され受け止められた者にふさわしく生きようとする時、「**万事は益となるよう共に働く**」、ホロコーストのような人の罪が凝縮したような地獄のような現実をも突き破り、神が極めて良いと喜ばれた世界へ進む第一歩を踏み出すことになる、2000年前に語ったパウロの確信は、無名のアウシュビッツ収容者に、フランクルに、底辺託児所のロザリーに、ブレイリーさんに、そして今礼拝している私たちに響き渡っています。

9　キリストの弟、妹となる

そのようにして、私たちは、この地べたで成長していき、とうとうやってくる終わりの時、神によって決定的に変えられるとパウロは語ります。どのように変えられるのか？イエス・キリストの弟妹とされる、イエスさまに、神の御子に似た者とされるというのです。これはまだ実現していませんが、確実に約束されたことであるから、私たちは、今現在、喜んでその日を待ちつつ、この地上でこの体をもって、呻きつつ生きることができます。「苦しみにあっても喜びをもって耐えられる」というのは、パウロの確信です。18節「**現在の苦しみは、将来わたしたちに現されるはずの栄光に比べると、取るに足りないとわたしは思います。**」

今日は午後から教会総会を持ちます。誰も経験したことのないコロナ禍の中での教会活動について話し合います。将来、キリストの妹、弟となることを約束されている私たちが今、神を愛する者としてどのように教会活動を続けていくか話し合います。キリスト・イエス、地べたにやってきてくれた救い主の証人として、地べたに立つキリストの体なる教会を共にたて上げていきたいと切に祈る次第です。